

書 評

Anna-Stina Ellverson:
The Dual Nature of Man.
A Study in the Theological Anthropology
of Gregory of Nazianzus

(Studia Doctrina Christianae Upsaliensia 21.)

Uppsala 1981, pp. 119.

大 森 正 樹

プラトンによれば、人間は魂と身体から成るものであり、しかもこの魂と身体は互いに向かう方向を異にし、善くも悪くも二方向に分裂していくとされる。そこに人間存在の謎と問題性があるわけだが、この間の消息をプラトン主義の流れの中にありながら、かつはキリスト教徒であったカッパドキアの三星の一人、ナジアンゾスのグレゴリオスに問おうとするのがこの小著の目的である。従って目指すところは、魂—身体といった二元的人間理解と、人間は神の像であるというキリスト教的人間観の關係、罪への傾向をもつとされる身体をもつ人間がこの地上で生きていくことの意義、最終目標である人間の神化の解釈、といったことになる。

本書は5章から成る。第1章は序論で、そこでは全体の構成がまず述べられる。アレクサンドリア学派の流れを汲むグレゴリオスは身体と靈を基本的に区別するが、この二重の性格ゆえに人間は靈的世界と物質の世界の両方に属する、いわば中間的位置を占めるものと判定する。その上で著者はグレゴリオスの神学は1) この二重性は何故なのか、またもし人間が天上的存在として靈的な生を送るべきなら、どうして身体的生の煩わしさをもつのかを問い、2) 人間存在のこの二分法的性格に実存的側面と存在論的側面があると指摘する。

第2章は「靈的で身体的な存在としての人間」を取り扱う。グレゴリオス是对比的な言葉で、人間は二つの世界に住むゆえ、見えるものでもあり、見えないものでもあ

ると言い、人間の霊的現実には物質的なそれよりもより高いが、物質そのものは必ずしも悪ではなく、ただ霊よりも低い位置にあると考える。人間はこの相反する本性が混ぜ合わさったものであり、グレゴリオスはこの相反するものを一つにするとともに、神の偉大さを見ている。世界の創造も最初は可知的世界、それから物質界という順で、可知の世界に属する天使にも一種の身体性をもたせて考えているところに、グレゴリオスの特徴がある。また人間の魂には神的なところ、天上的なところがあり（神の息吹きを受けたため）、ここから人間の欲求の目標として神が立てられる。魂が目指すのは勿論天の国であるが、それは身体にとっても目指すべき目標である。

グレゴリオスの場合、人間が神の像と言われるのはその魂のことであって、彼においては *eikón* と *ὁμοίωσις* の区別は見当らない。興味深いことに最初の人間アダムは未成熟であって、完全ではなかったとグレゴリオスは考えている。人間の最終目標は神化であって、これは御子と聖霊の力によって可能となる。神化は人間の身体をも含めた出来事であるが、他方でグレゴリオスは身体が神認識のためには妨げであり、魂にとり厄介な代物であって、これは墮落によつて、本来は魂が身体を支配すべきだと言つて、身体に対しアンビバレントな態度をとっている。この物質界への二重の態度は、著者によれば、グレゴリオスが創造を神が創造した世界（つまり神の造り給うたものは善し）として存在論的に考える時には肯定的態度をとり、人間の位置を霊的な観点から、また実存的な眼で見れば、否定的な態度をとっていると言ふ。グレゴリオスが代表するようなキリスト教内のプラトンの伝統を汲む人々は、必ず、地上のものに対して、ある種の緊張を内包していると著者は述べている。

第3章は人間は何故「身体的存在」であるのかを問う。即ち人間が地上で身体をもって生を営むことの理由を問う。著者はこれをグレゴリオスの様々の著作 (Oratio) や『教義詩』をもとにして論じる。そこから①人間の罪と墮落への傾向性、②人間は目指す善を自分自身で獲得しなければならない、③人間はマイクロコスモスである、というグレゴリオスの三つの基本的な思考の線を引き出してくる。グレゴリオスは原初の人間アダムは完全ではなく、幼児的であったというイレネウスの流れを汲んでいる。人間が禁を犯して食した果実は知恵の木のそれであるが、これはテオーリア（観想）のことであり、未だ時至らぬのに、余りにも早く知恵の実を食したことが墮罪なのであると言ふ。アダムは完全な光を分与されておらず、まだ神を観想する状態になかった。むしろ観想に距離をとっているべきで、始めから神の光を有していたらルシファ

一のような最大の墮罪を犯しただろうとグレゴリオスは考える。人間は創造された時から善悪二つの方向に可動的であって、この道徳的可動性が人間の弱さであるが、またそれゆえに自由をも有している。ルシファーのような罪を犯さなかったのはひとえに身体があったおかげで、それゆえに永遠の断罪を人間は免れている。著者は墮罪に関するグレゴリオスの見方、及び人間観を探究することが大変重要であることを説くが、その際大方の研究者と著者の見解には相違があることを示唆する。例えば H. Althaus はアダムは未発達な人間であったから、自分のなしたことの意味をわかっていなかった、つまりその罪は情状酌量の余地あるものとしたが、それに対し著者はこれではアダムの責任が欠くなってしまい、グレゴリオスも原初の人間に完全な責任があると考えているとして反論している。人間の墮落は個人の神への不従順の結果であり、それはヌースや魂の墮落であるが、この罪の原因はそもそも人間が魂と身体から合成された存在であることによる。そのため罪に曝されると同時に完全に罪のない状態にあることは不可能となるのである。かようなものとして造られた存在は墮罪を避けることは不可能であった。つまり人間の内面の闘争や分離は本来的に備った危険性なのである。

グレゴリオスによれば身体ゆえに人間は浄化を受けるので、身体は人間にとり教育的な意味をもつ。つまりたとえ傲慢になっても、身体の低さを思うとそれが止み、過大な自己評価をしなくなる。身体にまつわる諸々の困難や苦痛は神を呼び求めさせ、ここでも人間の自負心は矯正される。しかしこの苦しきも神へ向かうゆえに栄光あるものとされ、抑圧された人や病人への同情も生まれてくる。グレゴリオスは身体を一方では労苦多いものとして敵視しながら、他方でこの地上を歩む仲間として見るという、その身体観のズレにより、やはり二重の態度をとっている。人は自分で神と共なる生を獲得すべきである。それはこの労苦多い身体と共に歩んだ後に報賞としてもらうものである。そのためには善悪の選択に鋭敏でなければならない。霊と物質の中間存在である人間は、魂の導きに従って神へと歩いていくことがそのとるべき道である。

第4章はグレゴリオスの神学体系の特徴を創造・人間・受肉・神化・神との交わりに分けて説く（救済論は除外されている）。ここでもグレゴリオスにはプラトンの思考に沿う所と離れる所が見られる。創造に関しては、存在を賦与することとしての創造と、二段階の創造（まず神が世界のアイデアを有し、次いでこのアイデアを実現させる）を中心として、霊的世界と物質的世界の形成が語られる。また人間が既に存した地上

神の息吹きを受けて形成されたことにより、神と物質の距離が縮まったこと、また本来はこの身体と魂はもっと密接に結び合わさっていることが指摘される。更にキリストは神と人との比類ない混交であって、人間学はキリスト論を前提とする。グレゴリオスはキリストの人性に深く思いを凝らし、人性そのものの価値を回復する。キリストの受肉は人間学的観点のみならず、宇宙的観点からも解されねばならない。それは神が世界の創造者であるばかりでなく、創造する御言葉によってすべてのものを包容するということである。そこにキリストと聖霊による人間神化という考えも含まれてくるであろう。つまり人間は先にも触れたように、もともと神的な起源を有しているながらも、身体をもつことにより始めから神と距離をとって置かれた。また自由意志により神から離反することも可能であったが、キリストと聖霊の働きにより、この身体・被造物全体を神の方へ向け直し、神的要素を回復させ、最終的に神化が成立するのである。ところでグレゴリオスはこれらのことを語る時、「流出」という新プラトンの用語を用いているが、人間を単なる霊と物質の中間的存在とするプラトン主義を離れ、受肉を語り、復活を語り、最終的に人間を神へと導くキリスト教の立場を堅持している。

終章では人間と三位一体を扱う。グレゴリオスは救済と創造のオイコノミアについて語っているが、ギリシア教父としてグレゴリオスは父は始源、子は実際に創造したもの、聖霊は完成するものと言う。そして人間の完成については、これは先のことでまだ成就されていないと語る。父は原理であって、子は父から生まれ、聖霊は父より出る。この三位の中に父からの動きと父へ還る運動が見られるが、この三位の内における関係がまさしく人間が神から出、そして神へ還っていくことの根本モデルである。人間は魂と身体から合成されたものであり、その限りでまだまだ不十分な存在である。しかし人間が範とすべき神の三位の関係こそは、この二元的存在の限界を超えた、一切の被造物が追慕する源泉なのである。

カッパドキアの三教父の宇宙論や人間学は研究されることの少い分野であるが、それでもグレゴリオスの人間学については若干の研究がある。そのようなものの一つであるこの書において、著者はいくつかの観点からグレゴリオスの人間学を粗描してみせる。二元的な存在次元を内含する人間の二見したところ矛盾する諸側面を介して、グレゴリオスがプラトンの伝統に立ちながらも、キリスト教神学との調停にいかん苦闘し、人間存在の謎に迫っているかを論述している。小著ではあるが、グレゴリオス

での人間学への橋渡しとしては格好のものであろう（ただ著者のくせであらうか、副詞的な *though* の多用は少々耳障りではあったが）。教父研究の分野では、今後は、人間学のみならず、宇宙論までも視野に収めた総合的な成果が期待されるところである。

Gillian Clark:
Augustine, The Confessions
Landmarks of World Literature

Cambridge University Press, Cambridge, 1993, pp. xii+110

松 崎 一 平

本書は、世界文学の傑作をコンパクトに紹介し論じる叢書 *Landmarks of World Literature* (*The Tale of Genji*, *The Aeneid*, *Doctor Zhivago* など既刊40余冊) の一冊。著者はリバプール大学の *lecturer in classics*。本書と同年に *Women in Late Antiquity, Pagan and Christian Life-styles* (Oxford U.P.) を刊行している。前号の書評で中川純男も指摘するように、*Conf.* に関する書物が近年相次いで出版されていて、本書もその中に数えられよう。が、Starnes や O'Donnell の注解書とは異なり、*introduction* (p. vii) という性格上、本書には注もなく、先行研究への言及も乏しく、書評に取り上げるには相応しくないようにも思う。しかし思想的理解の素材として *Conf.* を読むことが、我が国の *Conf.* 研究の基調となってきた、文学的に論じられることの希なことを思うと、文学研究の側で *Conf.* が現在どう読まれているか知ることは、私たちの知見を均衡のとれたものにするためにも、とても大切なことだろう。もっとも本書は文学研究の側から *Conf.* を扱ってはいるが、著者は *Conf.* は *polyphonic* な著作であり、各声域において聞き解かれるべきだ (p.83 他) と考えていて、哲学的や歴史学的な視点をも欠きはしない。

まず全体の構成。短い緒言と、簡潔な年譜、序論、六つの章、主に第二次大戦後に英語圏で出版されたものから精選した諸書に簡潔な評を付した、使いでのある文献リスト「さらなる読書の手引き」からなる。1章「Aug.の世界」、2章「ジャンル：生涯を記述すること」、3章「真の告白とは？語りと記憶」、4章「真実を語ること：修